

サンパルク 650 自治会、7月22日、「体験型講座：減災・災害対応訓練」の報告

海老名災ボラ：サンパルク650自治会の防災訓練担当：福田博



杉久保北にある「サンパルク650自治会」(注)は、海老名災害ボランティアネットワークの支援・協力を得て、海老名市内の大規模団地で初めて、「体験型講座：減災・災害対応訓練」を7月22日に実施した。この減災・災害対応訓練は、①地震災害発生時に自分の命と健康を守る基本行動を身につける訓練、②地震が発生し電気・ガス・上下水道などのライフラインがストップしても、比較的安全な団地内で「在宅避難生活」ができるように各家庭での「事前の

備え」を実施し、地震災害に対する住民の災害対応能力(自助能力)を高める事を目的としている。

7月22日(土)に9時に団地管理棟内の集会室に自治会と管理組合の役員が集まり、訓練の用具の設置など会場設営を行った。9時30分に住民の参加者受付を開始し、10時から開会式が始まった。参加者は受け付け順にグループ(4班、各10名程度)に分かれ、各訓練用具を設置した場所(管理棟室内と駐車場)を順に回って体験型講習を受けた(当日の参加者は約60人)。地震災害の想定としては、震度6強の地震が起り、電気、ガス、水道などライフラインはストップしたが、団地の建物自体は大きな損傷はないという想定で訓練を開始した。

(注)サンパルク650自治会：海老名市にある11階建の分譲マンション群で、総世帯数は644戸。建設時期の違いから3街区6棟の建物があり、街区ごとに「管理組合」があり、自治会は一つで任意加盟となっている。

〈体験型講座・訓練の報告〉

1)「水の備蓄と水運び体験」：管理棟の駐車場で、近くの公園内にある給水拠点から団地の自室まで飲料水を運ぶ想定で訓練を行った。水担当の説明員から「一人1日3ℓ」の飲料水の備蓄(3日間以上1



週間くらい)が重要であるという説明を行ない、参加者がその場に置かれた様々な種類の容器に水を入れ付近を歩き、どのような種類・重さの容器が自分に適しているのかを体験した。

参加者からは「20リットルのプラスチック製容器では重すぎる」、「10リットル以下でないきつい」「階段を登れるキャリアが必要だ」とか、さまざまな意見が出された。全般的には、「水運びは大変だった。水備蓄の重要性が良く分かった」、「エレベーターが止まった状態で、高層階(この団地では11階までである)まで水を運びの

は容易なことではないので、何らかの対策を自治会としても検討して欲しい」等の意見が出された。

2) 「災害時のトイレ対策」：水道が断水し、水洗トイレに水が流せない状況となったという想定で、訓練を開始した。団地内の水洗トイレを想定した「簡易トイレ」(プラスチック製や段ボール製トイレなど)で、トイレに水を流さずに「排泄物を固形物として処理する方法」を体験学習した。参加者からは、「電気が止まり、水道もストップした時に、トイレの水を流してはいけないことを初めて知った」、「排水管損傷の有無を確認するまでの間に水を流すと下層階で漏れ出すことがあることを始めて知った」などの感想が出された。



3) 「家具類の固定化・移動や落下の防止対策」：室内にいた人が地震でケガをする場合に、家具や電気器具などの転倒・移動・落下によることが多い。特に高層階では揺れは増幅されるので、家具類の固定化は大きな課題である。そのため、家具類の転倒防止、落下防止(照明など)、移動防止(テレビやレンジなど)の対策(固定化)を事前に行うことが必要である。転倒防止は、壁の丈夫な部分(柱や梁)に金具を使って固定するのが基本であるが、家具と天井の間に突張り棒を入れる、家具の下にゴム製マットを挟むなどの方法がある。



参加者から、「自分は高齢で、家具を固定化もどうやればよいか分からない。誰か協力して欲しい」という意見が出された。「シルバー人材センターに頼む方法(有料)もあるが、困ったときは自治会役員に相談してほしい」と説明員(自治会役員)は回答した。

4) 「ガラスの飛散防止対策」：ガラス飛散防止フィルムを貼る作業

地震で、窓ガラスや家具類のガラス部分が飛散し、ケガをすることも少なくない。そこで、事前に「ガラス飛散防止フィルム」を窓ガラスや家具のガラス部分に貼る方法を実演しながら説明した。ガラス飛散防止フィルムは、泥棒がガラスを破って簡単に家に進入することを防ぐ防犯上の効果もある。

参加者からは、割れたガラス片をみて、ガラス飛散防止フィルムを購入し、さっそく貼ってみたいとの意見が多数出された。



5) 「通電火災防止」と災害準備ノートの作成、安否確認など：通電火災防止、安否確認のために

地震による停電から復旧する際に、電源が入った家電製品や落下物で断線したケーブルに通電して発生する火災が通電火災と呼ばれている。この課目は自治会から独自提案のあったもので、自治会役員が、団地内のブレーカーの復旧の手順を図で説明した。

災害準備ノートとは、本人の氏名や住所、年齢、性別、緊急連絡先、血液型、既往症、かかりつけ医などを記載す

る A4 版 1 枚のもので、これがあれば、本人がケガをして動けない場合でも、他の人が適切な対応が出来るようになっている。海老名市では、「えびな安心キット」(救急医療情報シート)を高齢者のみ世帯に民生委員から配布していたが、それと同様の内容になっている。

6) 炊飯袋(ハイゼックス)による炊飯実演と災害食(アルファ化米)の食事体験

参加者は海老名市から提供された災害食(アルファ化米)の袋に名前を書き、袋にお湯を入れて約 30 分蒸らしてから皆で食べた。また、お菓子「ジャガリコ」(自治会で購入)にお湯を入れて捏ねた「ジャガイモ・サラダ」を各テーブルで作り食した。

自治会が用意した卓上コンロと鍋を使ってお湯を沸かし、炊飯袋(ハイゼックス)に米(1 合)と水を入れて輪ゴムで閉じて、沸騰したお湯の中で 30 分煮沸した。これを発泡スチロールの箱に入れて 30 分蒸らした。炊飯袋(ハイゼックス)で炊いた米を、何人かの参加者に食してもらった。「お米の種類が良いのか、おいしく炊けている」との感想が出された。そこで、災ボラの持つ炊飯袋(ハイゼックス)を販売した。参加者は話し合いながらアンケート調査票に記入し、訓練を終わった。

7) シェイク・アウト訓練：災害発生時に、自分の身を守る行動の訓練

自治会役員(防災指導員)が「地震発生」と大きな声を出すと、参加者はそれぞれの場所で「姿勢を低く」、「頭を守って」、「揺れが収まるまでじっとして」というシェイク・アウトの基本行動を行った。室内にいた参加者は机の下で、この姿勢をとり、3 分後に、この姿勢を解除した。

◎今回の体験型講座：減災・災害対応訓練から今後の課題を抽出し、解決方法を検討することが重要である。また、1 回だけでなく継続した取り組みを通して、一人ひとりの住民の災害に対する自助能力を高めるとともに、災害に対する事前の備えをする家庭を増やしていくことが必要であると思う。

〈自治会主催による「体験型講座：減災・災害対応訓練」の実現、今後の対策の継続・拡大を！〉

海老名災ボラが 2016 年 11 月 26 日に市民向けに開催した「体験型講座：減災・災害対応訓練」に、サンパルク 650 の自治会役員(2 名、自治会長と防災指導員)が参加してもらった。これを契機に、サンパルク 650 自治会と災ボラの相談が開始され、住民の「自助」能力を向上するための防災・減災訓練について、海老名災ボラの担当者と協議を続けてきた。約 8 ヶ月かかったが、今回の自治会主催・災ボラ支援・協力の「体験型講座・防災・減災訓練」を実現することにつながった。

一般的にいうと、防災減災対策に熱心な自治会役員がいる時はこうした訓練・取り組みが進むが、そうした方が辞めると「関心も薄くなり活動も低下する」例が多い。そうした限界を超えて、自治会として継続した活動を続けられるかどうかは鍵であると思う。

〈海老名災ボラのサンパルク 650 自治会への支援・協力と反省〉

1) 海老名災害ボランティアネットワークでは、今回の訓練内容に関わるマニュアルを資料として提供した。自治会役員は災ボラが提供した資料だけでなく、インターネットを通じて取得した情報をもとに、当日の参加者向けマニュアルを作成した。その熱心な態度に敬意を表したい。

2) 自治会が保有する防災資機材(簡易トイレ、20 リットルの水容器)をチェックするとともに、災ボラは不足する訓練用具を会場に持ち込んだ。

3) 自治会と管理組合の役員に「予行演習」として、事前に「体験型講座・減災災害対応訓練」(7 月

16日)を受けてもらい、役員が7月22日の各課目の実演・説明の主役になってもらった。非常に熱心な役員がいることに驚かされた。

4) 海老名災害ボランティアネットワーク会員(出席5名)は自治会と管理組合の役員が講師となったが、その補佐役として訓練全体の円滑な実施に協力した。

〈自治会・諸団体と共同活動できる海老名災ボラへ、人員とノウハウの拡充を!〉

自治会や他団体に、災ボラが訓練内容・方式を「一方的に押し付ける事ではなく」、自治会や他団体の役員の防災・減災訓練に関する問題意識を聴くことが出発点である。自治会や他団体の役員の背後には、その団体を構成する人々があり、人々の防災減災に関する関心の程度が役員の中に反映されている。

自治会や他団体の役員の問題意識に合わせて、災ボラの持っている「実践的な知識と経験」(マニュアルに表現される)、「訓練の運営・実施に関する経験とノウハウ」(=災ボラ会員の人材としての質と量)、「災ボラの持つ防災資機材」などを組み合わせて、「自治会や他の団体の自主性・自発性を引き出す方向で」、それぞれの団体にとって実現可能な方式⇒一歩前進となる道を提案していくことが重要である。

自治会や他団体との接点を広げながら、同時に防災・減災訓練を共同活動として実現できる人員とノウハウ(実践的知識と経験の蓄積)の充実を粘り強く実現していくことが必要であると思ふ。